

第4章 沼田町の農業

中橋智樹

4.1 概要

4.1.1 近年の状況

沼田町は、北空知にとどまらず道内有数の稲作地帯であり米が中心である。沼田町では、明治期の開拓から稲作がはじまり、それ以後水田が徐々に拡大していき、現在の規模にまで発展した。図 4-1 をみれば明らかなように、その作付面積は町内の耕地の 7 割に達している。2008 年度では、185 戸の農家が米の作付けをおこなっており、1 戸あたりの平均が 10ha を超える大規模経営である。米が他の作物よりも生産されているのは、近年、値段が下がっているとはいえ、相対的に高い収入を期待できるからであろう。また、機械化が進んだことによって、他の園芸作物より手軽に生産することも、理由のひとつとして考えられる。さらに、1995 年に竣工したスノークールライスファクトリーによって、農家の負担が大幅に減少したことも農家の意識を大きく変えたと思われる¹。また、2003 年以降になると、北海道農協米対策本部が定める配分ランキングにおいて最高位の 7 ランクを維持しており、単に作業の軽減にとどまらず、品質の向上も米作への期待を高めていると思われる。

沼田町では、米からの転作作物である大豆・麦・蕎麦なども栽培されている。表 4-1・表 4-2・図 4-1 にあるように、転作作物の主力はそばである。細かな作業があまり必要とされないことが、転作作物選択にあたっては重要な要素であり、そばは比較的その条件に適した作物である。また、出荷量では小麦が最も多くなっている。米用の機械を使用できることが小麦栽培のメリットである。また、そばに比べ、小麦などの作物の方が歩留はよい。

園芸作物としては、馬鈴薯・ブロッコリー・花卉・メロンなどが生産されており、米を中心とした複合経営によって収入を増やそうとしている。

表4-1 沼田町の主要作物面積(単位:ha)

	米	小麦	大豆	小豆	そば	甜菜
2006年	2,503	194	269	36	492	69
2007年	2,507	182	248	32	534	70
2008年	2,507	187	240	28	512	71

JA北いぶき提供データより筆者作成

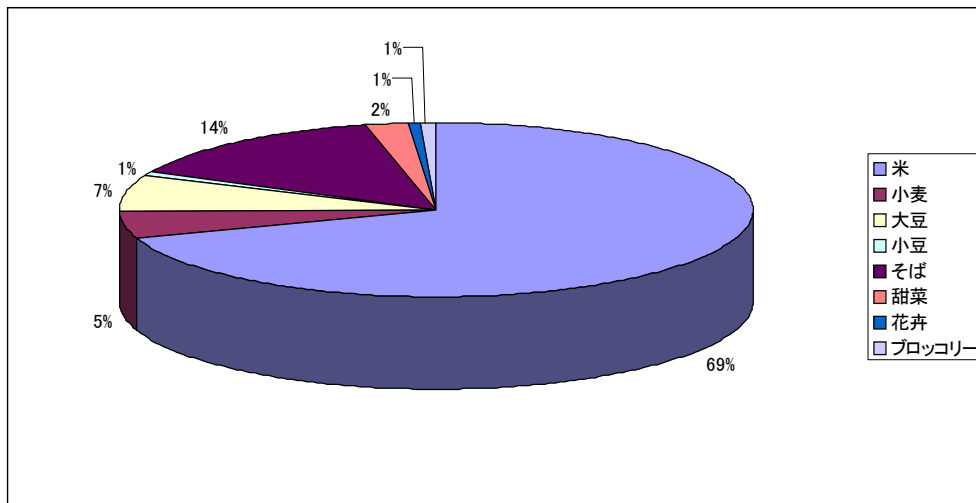
表4-2 沼田町の主要作物出荷量(単位:kg)

	米	小麦	大豆	小豆	そば	甜菜
2006年	13,884,840	610,169	597,442	57,906	449,685	3,275,360
2007年	13,891,500	740,186	497,707	48,337	392,875	3,819,650
2008年	15,380,880	845,744	597,651	57,439	379,180	5,097,430

JA北いぶき提供データより筆者作成

¹ 2008.9.30 沼田町農業振興課への聞き取りによる。

図 4-1 沼田町の作付け面積の割合(2008 年度)



出典：JA 北いぶき提供データより筆者作成

4.1.2 第 7 次沼田町農業振興計画

現在、沼田町では、第 7 次農業振興計画の計画期間である(2007 年 4 月～2012 年 3 月)。沼田農業の持続的発展を目指すことが基本方針とされ、その基本目標として以下の 5 つが設定されている。

1. 農業所得確保に向けた収益性の高い農業構造の確立
2. 効率的な農地集積と協業化の推進による農業資産基盤の確立
3. 沼田農業の持続的発展を支える担い手の育成確保
4. 環境保全型農業に取り組む営農活動の推進
5. 地域交流など豊かさと活力ある農村づくり

また、振興計画の中で、利雪型農業の推進については「付加価値農業への取り組み推進」の中で触れられており、利雪型農業に関する事業を今後も継続させ、地域ブランド化を推進していくとされている。

4.1.3 農業の支援体制

沼田町では、沼田町農業振興課と JA 北いぶきが中心となって農業関連の事業を推進している。しかし、それぞれの農家への関わり方は異なっており、この二者は、基本的には協力しあっているが、必ずしも考え方や目指す方向は同じであるといえない点もある。ここでは、2 つの組織を概観し、農業に対するそれぞれの姿勢についてみてみよう。

①沼田町農業振興課

農業振興課は、農業に関連する事業を担当している部署であり、課長を含めて 7 名の正規職員と 3 名の臨時職員が在籍している。図 4-2 は沼田町の機構図である。これを見ればわかるように、農業振興課は役場の部署の中で唯一産業名がついている部署である。ここ

からも、沼田町において農業がいかに大切な産業であるかがうかがえる。

また、付属機関として、農産加工場・五ヶ山地区模範牧場・就農支援実習農場がある。

農産加工場ではトマトジュースや缶詰類を生産しており、トマトジュースは、町外からの人気も高く、沼田町の名産品にもなっている。職員 2 名が在籍し、工場長が課長を兼務、13 名が臨時職員として在籍している。

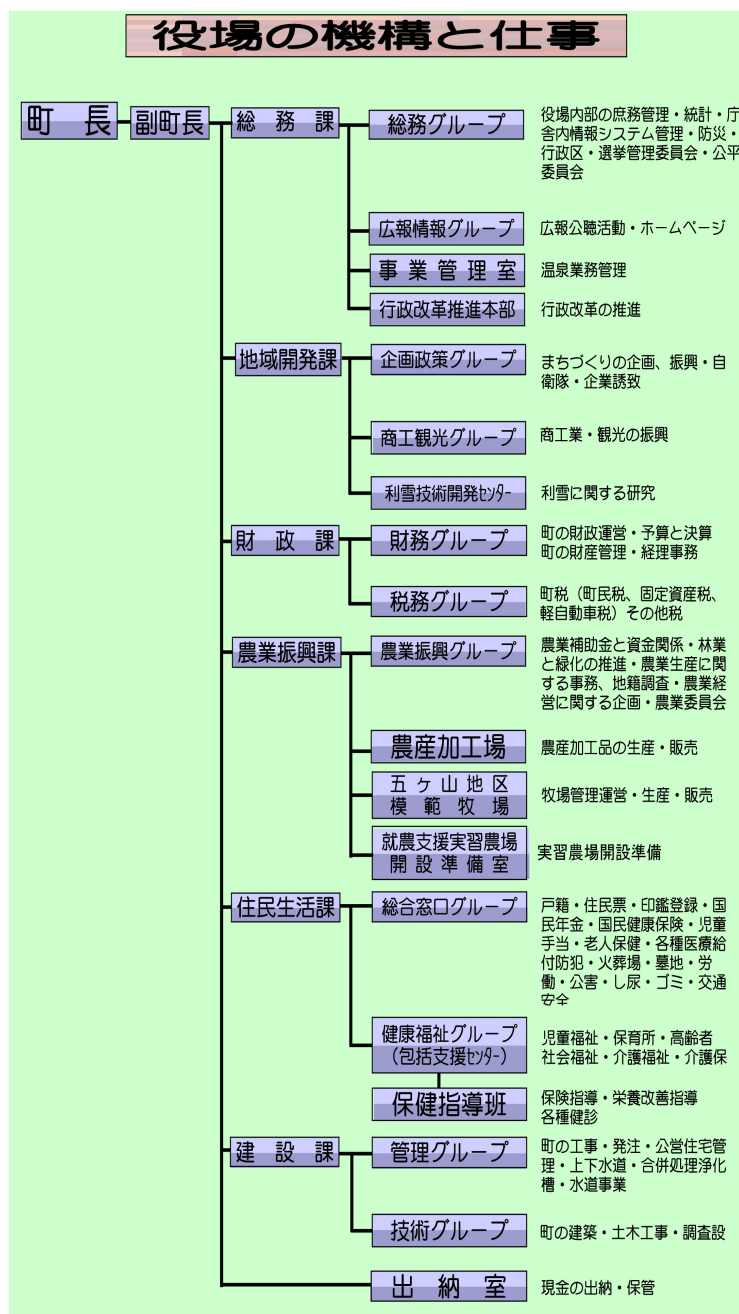
五ヶ山地区模範牧場では黒毛和牛が肥育され、肉用牛枝肉の品評会で最優秀賞を獲得している。2 名が職員として在籍している。就農支援実習農場については第 5 章で詳しく触れる。

農業振興課は、もちろん米が沼田農業の中心であり、それを支えていくことが重要であるという認識を持っている。しかし、その一方で、米価の低迷が農家に深刻な影響を与えており、なんらかの対策が必要であるとの認識も強く持っている。そのひとつが、農

業の多角化戦略である。農業振興課の付属機関である加工場・牧場・実習農場は、米以外の部分に活路を見出そうとしている町の姿勢の現われであるといってもよい。スノークールライスファクトリーの成功によって沼田町は認知度を増した。しかし、利雪の取り組みも、現状においてはスノークールライスファクトリーが突出した成功例といわざるを得ず、米以外の取り組みは大きな成功を収めるまでには至っていない。

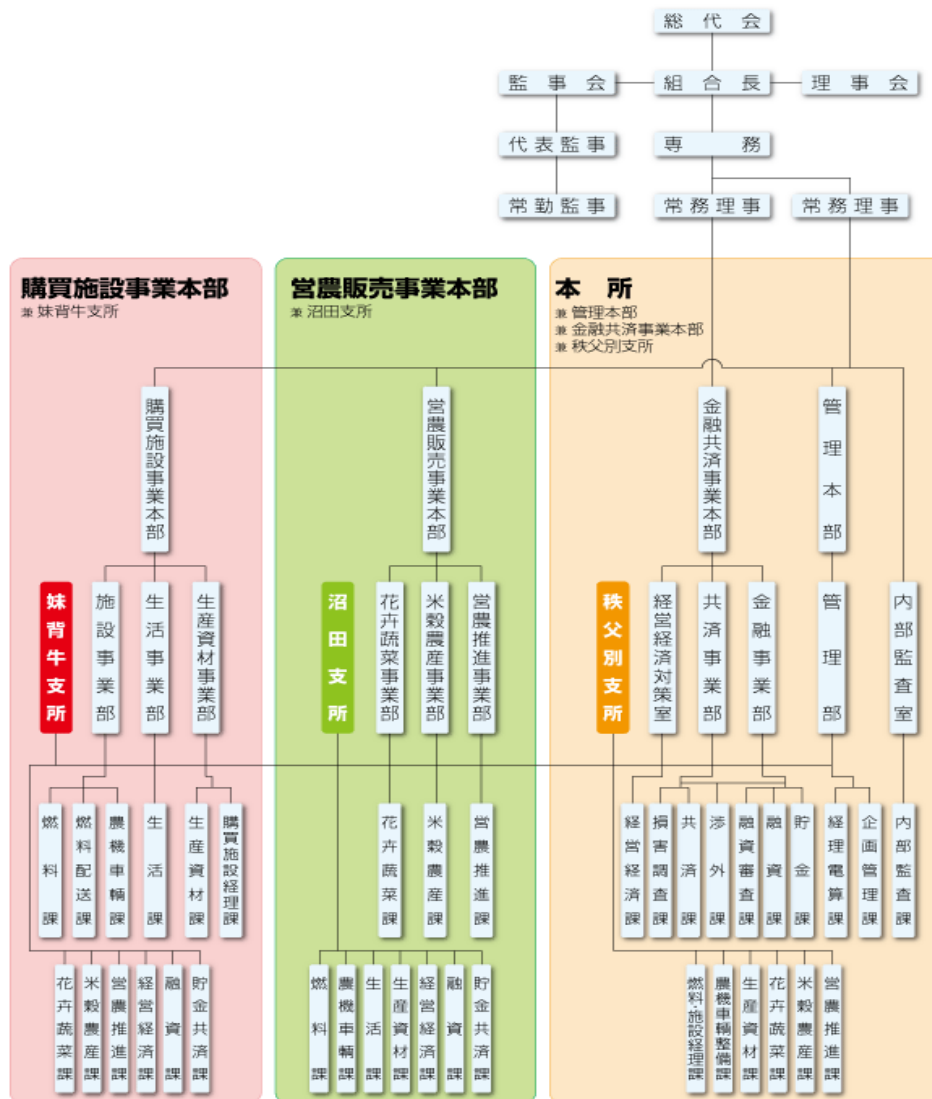
農業振興課でも、スノークールライスファクトリーに取り組みはじめてから 10 年以上が

図 4-2 沼田町役場機構図



出典：沼田町役場 HP

図 4-3 JA 北いぶき機構図



出典：JA 北いぶき HP

経過しようとしているので、JA と共同で新たな取り組みを展開しようという思いはある²。そして最近、シイタケ・イチゴ・花卉などで利雪の取り組みを拡げていこうとしている。

また、農業振興課の抱える大きな課題のひとつに、日本農業で大きな問題となっている後継者不足がある。具体的な対策としては、農業生産法人の形成を推奨しているが、いろいろと問題も多いようである。

②JA 北いぶき

北いぶき農業協同組合（以下「JA 北いぶき」）は、妹背牛・秩父別・沼田の 3 農協が 2003 年に合併してできた農協である。この 3 農協は、北空知での大規模合併が検討された際、経営的に体力があると判断され、その合併に参加しなかった。合併前の JA 沼田は、1947

² 2008.9.30 沼田町農業振興課への聞き取りによる。

年の農業協同組合法および農業団体整理法公布を受け、翌 48 年に設立された。沼田町で農地を所有している人たちはすべて JA 組合員（正組合員もしくは準組合員）になっている³。

合併後の経営方式として事業本部制を採用し、図 4-3 にあるように、秩父別が管理本部と金融共済事業本部、妹背牛が購買施設事業本部、そして、沼田は営農販売事業本部となっている。これは珍しい運営体制だといえるだろう。また、3 町とも、米穀調整施設を持っており、その中では、沼田のスノークールライスファクトリーがもっとも古い。職員の所属は、本部については本所職員、それ以外の部署は支所職員の扱いとなっている。

JA 北いぶきでは、講習会や青空教室を開いたり、普及センターとも連携をとりながら、農家に対する働きかけを行っている。他にも、ファックスを利用した農薬使用に関する指導などといった、さまざまな取り組みを行っている。

雪に関する取り組みは、雪中米に関する事以外には直接に関わっていない。スノークールライスファクトリーのような施設は、ランニングコストは安い、イニシャルコストが莫大な金額になってしまうのでなかなか手を出せないのが大きな理由である。また、麦や大豆などで利雪の取り組みを行って付加価値をつけたとしても、効果を期待することができるか定かでないという判断もある⁴。利雪の取り組みは、役場の動きが先行しており、JA が積極的であるとは言いがたい。JA にとっては、雪を使うことが、農家経営に対してプラスになるかどうか判断基準として重要である。また、妹背牛や秩父別ではもともと雪に関する取り組みを行っていなかったため、JA 北いぶき全体として利雪の取り組みを行うには多少動きづらい点もあるのかもしれない。

4.2 スノークールライスファクトリーと雪中米

4.2.1 スノークールライスファクトリーの概要

スノークールライスファクトリーは、1995 年に建設された米穀低温貯留乾燥調製施設である。この施設は、事業主体が沼田町、運営管理が JA 北いぶき沼田支所となっており、町と JA が共同で事業を行っている珍しい施設である。スノークールライスファクトリーは沼田町の農家のほぼすべてがなんらかの形で利用しており、町民の認知も相当高い。

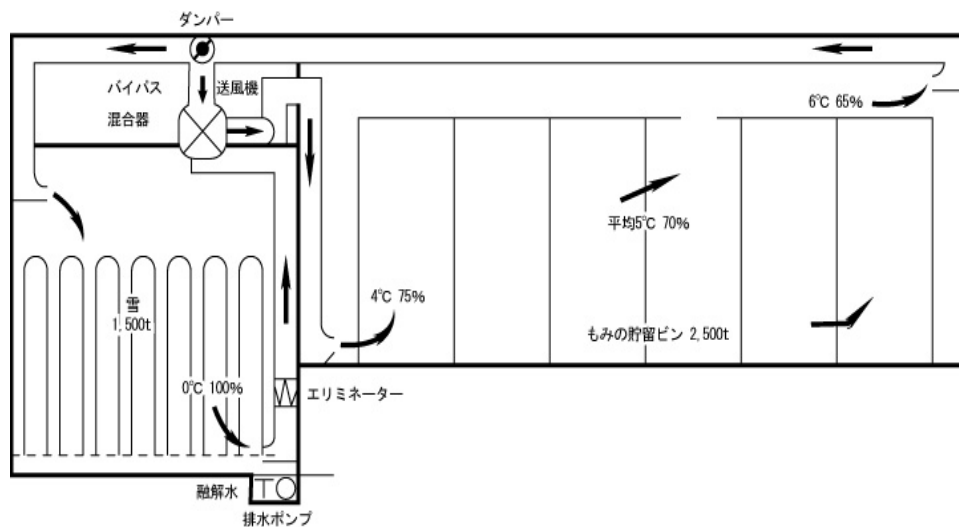
スノークールライスファクトリーの特徴は、雪を利用して温度 5℃・湿度 70%という米にとって最高の環境を作りだしていることである。また、雪を冷熱源としたことにより、送風機を回しているだけなので、電気冷房よりも経済的に有利である（湿度の調整で一部機械を使う）。電気冷房と比べると、約 5 分の 1 となっている。

スノークールライスファクトリーでは二段乾燥方式を採用している。まず、農家が個別に乾燥機を利用して前乾燥を行う。水分が 18%以下になるまで時間をかけてなじませ、水分が均質になった半乾燥粳をスノークールライスファクトリーに持ち込んで仕上げる。各

³ これは、北海道内においては一般的なことらしい。

⁴ 2008.11.14JA 北いぶきへの聞き取りによる

図 4-4 雪冷房の仕組み



出典：スノークールライスファクトリーパンフレット

農家において一次乾燥された半乾粳を乾燥貯留ビンで荷受し、5日間程度（乾減水分量 0.5% / 日）で 14.5%に乾燥仕上げを行い、粳摺り出荷する。この方法は、玄米の光沢維持や食味等の劣化防止などに効果があるだけでなく、二段乾燥方式によって生産現場および施設での仮貯留ができるようになり、スノークールライスファクトリーへの全量受け入れが可能になった。さらに、それによって、品質の均一化・大ロット化が図られ、販売面においても有利になったのである。米の品質は専門家の目で見たレベルでまったく異なるものになり、見た目も素人にもわかるぐらい玄米のツヤがあるという⁵。粳のまま保存することによって、農家が精米を行う必要がなくなり、農家の負担が減ったことも大きい。

4.2.2 利用実績

施設利用料は現在 1 俵あたり 360 円となっており、類似の施設と比較するとこの値段はかなり安い、施設の運営はすべて利用料でまかなわれている。最近では、秩父別産米も一部搬入しているが、町外の利用の場合は利用料が高めに設定されている。処理量は、当初計画では 8100 トンであったが、2002 年度の実績は 12132 トン、また、1 日荷受量は、当初計画では 373 トンだが、2002 年度実績では 700 トンとなっており、いずれも当初計画を大きく上回っており、稼働率はきわめて高い。

4.2.3 雪中米

雪中米は、スノークールライスファクトリーで、粳のまま雪の冷熱エネルギーを利用して保存され、出荷されたものにつけられる名称であり、夏になっても新米の風味が味わえるところにその価値がある。雪を利用した粳の備蓄の安全性が認められたにとどまらず、

⁵ 2008.11.14 JA 北いぶきへの聞き取りによる。

食味維持という点でも効果を発揮することが明らかとなり、今では押しも押されぬ沼田町の特産品である。主な出荷先は北海道外となっており、一部は海外にも出荷されている。他方、北海道内や沼田町内で消費されることはほとんどない。雪中米はホクレンを通して販売されており、その一部は食創という道内の卸売業者にも出荷している。

雪中米は、ビンに貯蔵された 2500 トンの粳を、3 月下旬に搬入した貯雪槽の雪冷熱を空調混合器によりコントロールして、4 月中旬から 8 月中旬までの期間に外気温の上昇による貯蔵温度の昇温を抑え、貯蔵庫内の環境を温度 5℃・湿度 70%で保ちながら粳摺り出荷する。

雪中米の登場によって、沼田町の知名度はあがり、生産者のモチベーションもあがった。しかし、残念ながら、雪中米の効果は農家収入に反映されていない。ホクレンによる系統出荷になるために、他の産地との差異化が価格面にまで反映されないためである。沼田の雪中米にプレミアムがつく状況になっていないのである。また、雪中米の販売は、原則として雪冷房を利用した期間限定となっている。評価を得たとしても品物が無い状況になり、大手スーパーなどでの取り扱いが難しい。

もうひとつの問題は、地産地消の観点からのものである。雪中米のほとんどは道外で販売され、沼田町あるいは北海道で消費されることはあまりない。これについては、最近、沼田町内の商工関係者が中心となって「雪中米ファンクラブ」という組織が作られ、雪中米の道内での販売や消費を増やしていこうという試みがはじまった。

おわりに

沼田町の農業は現在、大きな転換期にきているといえるだろう。スノークールライスファクトリーが建設されて 10 年以上が経ち、その取り組みも順調に進んできた。しかし、そろそろ新たなことに取り組む段階にきているようにも思える。新たな取り組みについては、農業振興課も JA 北いぶきも、農家経営が安定するものを模索中といった状況である。しかし、雪にこだわるかどうかという点については、両者の意識は一致しているとはいいがたい。農業振興課は雪を積極的に取り入れていきたいと考える一方で、JA 北いぶきは収入が増えるものであれば、雪でなくてもよいと考えている。一見、沼田町の農業はスノークールライスファクトリーの建設以来、雪を介した取り組みが進展しているようにみえるが、まだまだ課題は多い。これらの課題を解決していくことで、沼田の農業はさらに発展させていくことができるのではないだろうか。